

## 決して失望することはない

「あなたがたは主が恵み深い方だということを味わいました。この主のもとに来なさい。主は人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです」

この御言葉に、今朝は、わたしたちの思いと心と生き方を重ねてゆきたいと願っています。

今日から、ペテロの手紙の2章に入ってゆきますが、冒頭に、「だから」という言葉が記されていたことに気づかれたと思います。これは英語の聖書だと「therefore」、文語表現で「それゆえに」という単語が使っていました。つまり、ここまで述べてきたことを受けとめて、だから、あなたがたは、このようになりなさいという勧めにつながってゆくかたちです。これは聖書の告げる真理といえますか、神の恵みと言い表して良いことなのですが、かならず神さまの恵みが先にある。神さまがわたしたちに先んじて必要な備えをしておられる。わたしたちを愛され、選ばれ、召されているという神さまの側の真実があります。キリスト・イエスの出来事を通して、その神さまの真実に信仰をとおして目を開かれた者たちが、この恵みに応えて生き始める。あなたがたは神に愛されている。そのことを言っている。「あなたがたは主が恵み深い方だということを味わいました。『だから』、この主のもとに来なさい。」キリスト・イエスに結ばれて新しく生まれたのだから、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。キリストの愛と慈しみを御言葉によって味わい、神の子として成長しなさい。そういう勧めをペテロはこの手紙の2章以下で具体的に展開してゆくのです。

わたしは新約聖書の手紙からの説教には苦手意識があります。それは直接、イエスさまの出来事を語るのではなく、パウロなり、ペ

テロなり、ヨハネなりを通して、彼らが出会い、理解し、伝えねばと主に託されたことを、彼らの群れに向かって語っている。いわば人づてに、具体的な教会の状況を通して、キリストを透かし見るような、そういう手間とといいますか、オブラートに包んだような感じとといいますか、それよりは直接、イエス様に出会いたいという思いが強い。ただ、これは先輩牧師にいわれたことなのですが、書簡の説教をしないと教会はたたないよ、と。キリストと出会って、わたしたちが具体的な身体をもつ教会につながって生きる。コリントの教会、ローマの教会、エフェソの教会、そしていま呼んでいるポントス・ガラテヤ・カパドキア・アジア・ピディニアの離散した仮住まいの者たちの教会、そしてわたしたちの半田教会、直接、生身のイエス・キリストとお会いすることはなかったけれども、聖霊の働きによってキリスト・イエスと出会い、神の恵みの招きによって、この方を主と定めて生き始めた群れである教会を、使徒たちがどのように立ち上げていったか、そこにどのような戦いがあったかを知ることはやはり重要だと思うようになりました。また手紙を読んでいて、そこに、パウロやペテロやヨハネたちが主のどんな教えを思い浮かべながらこの勧めを書いているか、福音書のイエスさまが浮かび上がってくるようになってきました。たとえば、今朝の、この2章の「だから」という展開は、さしずめマタイによる福音書のなかでイエス様が語られた「タラントンの譬え」にもつながりますね。旅に出かける主人が三人の僕を呼んで、それぞれに1タラントン、2タラントン、5タラントンを貸し与えるという話があります。この1タラントンというのは一日1デナリオンというぶどう園の労働者の話とは違い、こちらを一日1万円としますと大体6000万円くらい、5タラントンというと3億円くらいでしょうか。それを預けてゆかれる。タラントンはタレント、才能でありますから、わたしたちに神様から与えられている才能、ギフトがあり、この莫大な恵みの賜物をどう活かして生きるかとい

う話です。このペテロの手紙の勧めも同じ構造で、さきに、神様がわたしたちに恵みをくださっている。ちまちまとしたものではなく、莫大な資産、天に蓄えられている朽ちることも、萎むことも、汚れることもない資産を受け継ぐものとされている。復活という死に打ち勝つ生ける望みを与えられ、神から離れた罪人であった者たちがキリスト・イエスに結ばれて、神を父として生きることができるようになった。そのことのゆえに、「ナザレ人、イエスを、主と告白するものは呪われよ」と、彼らユダヤ人のコミュニティを追放された者たち、キリストの福音を受け入れたがゆえに、この地上のつながりから切り離され、天を故郷とする「離散した仮住まいの者たち」が生まれた。しかし、それは死者の中から復活された初穂であるイエス・キリストの民とされた新しいイスラエルの誕生でもあったわけで、こうして神様の一方的な恵みによって、選ばれ、捉えられ、神の民とされた信仰の現実があるのだから、それゆえ、あなたがたはそれにふさわしい存在へと作り変えられなさい、生まれ変わらなさいという勧めが2章から述べられてゆきます。

ペテロの手紙は、恵みを確認させ、恵みを生きるように勧める。良い音ズレを聴いたのだから、救われる前の生活から離れて、恵みに応えて生きなさいと勧める。混じりけのない霊の乳をしたい求めなさいと、栄養分をこの世のものからではない天来の、キリストの言葉、神の生ける希望によって成長するように求めるのです。簡単に言ってしまうえばビフォアとアフター、召される前と召された後、リフォーム前とリフォーム後のように、神へと比重が移ってゆく。恵みによって組み替えてゆく。洗礼は第二の誕生、天に国籍を持つ存在へと生まれ変わった日と言ってもよいわけで、霊的には新しくされて乳飲み子のような状態になる。それゆえに霊的な成長、キリスト・イエスに結び合わされて神の子として成長するために、わたしたちの救われる以前の生き方をふちどる悪意、偽り、偽善、ねたみ、

悪口を捨て去り、混じりけのない霊の乳、すなわち神の口から出るひとつひとつの言葉によって、愛と慈しみに満たされ、整えられて人格と人生と共同体を形づくってゆくチャレンジに生きる。キリスト者の生き方とはそのようなものです。それはこの世的な成功を意味しません。むしろ、この世を超えたところに照準をおいて生きる自由を与えるものです。この手紙の受けてとなった人々は、神の恵みを受け入れた結果、故郷を失い、ポントス・ガラテヤ・カパドキア・アジア・ピディニアに離散して仮住まいをすることになったのです。それを彼らは嘆いたでしょうか、生活の厳しさに愚痴ることもあったかもしれない。かつてイスラエルの民も荒れ野でエジプトでの生活を慕って愚痴ったことがあります。エジプトで奴隷だったときのほうが生活はよかったとさえいった。わたしたちの弱さとはそういうものです。だからこそ、手紙が書かれた。あなたがたが受け継ぐことになったものは何か、あなたがたはどのような存在とされているか、神は何をあなたに約束しておられるか。あなたの主、キリスト・イエスはどのような方であったか、何を命じられたか。命にいたる道から逸れてはならない。共々に御言葉に聴くのはそのためです。あなたたちは「離散した仮住まい」の現状を嘆くかもしれない。しかしそれはあなたがたが天に国籍を得たことのあるしです。またあなたがたは人々から石をもて追われたと思うかもしれない。しかし、あなたがたの主であるイエス様御自身が、まずあなたがた罪人を、異邦人を救おうとして、イスラエルの人々から拒絶されています。「あなたがたは主が恵み深い方だということを味わいました。この主のもとに来なさい。主は人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです」、そう言われる通り、あなたがたのために捨て石となって十字架にかけられたキリストの、その血によって清められ、贖い取られた尊い存在として、あなたも自分自身を形作りなさい。神が選ばれた隅の頭石であるキリスト・

イエスの上に生活を形作りなさい。それは共同のわざです。召されたキリスト者同士の助け合いによって形作られる群れへ成長してゆく。それが願われている。ここには老若男女がいます。ペテロの手紙を受け取った人々も色々な人がいたでしょう。しかし、彼らを召したのはみな同じ神であり、頭はひとつであるキリスト・イエスですから、目指す方向が同じなのは当然です。それぞれが違った歩幅でありながら同じ方向を目指して歩いてゆく。キリストを土台とする家として譬えられたり、キリストを頭とする身体としてそれぞれが身体の部位として譬えられたり、表現の仕方は様々ですが、目指しているところは、わたしたちが霊的な家として、霊的な身体として形作られて、わたしたちを召してくださった方の御心に叶った歩みをして、すべての人々をキリストへと招くことです。「地上の氏族はすべてあなたと、あなたの子孫によって祝福に入る」というアブラハムに約束された神の教えを実現するものとして、わたしたちは召されているのだという考えは、この手紙にもはっきりと表されています。あなたがたは「聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。」とある通りです。

最後に、このような聖書の教えに従って、わたしたちの歩みを顧みるときに思われることは、当たり前ですけれども、世の中は、わたしたちが身を置いているこの地上の世界は、神の御心にそって動いてはいないということです。たとえば、いまの生き方をあらわす自己実現という言葉は、現代人に、とくに若者に向けられた呪いの言葉だと思ふことがあります。この言葉は自己責任という言葉とセットになって、いわゆる「勝ち組」といわれるレースに乗れなかった者たちを様々なかたちで苛むのではないかと、金城学院や名古屋学院など、若者の教育の現場に関わっていて感じるのです。少し前に流行った「親ガチャ」という言葉も、自分の実力だけではもうどうにもならないくらいの格差が生まれながらにあって、そういうも

のがあるから自分の自己実現は難しいのだという現状に対する苦い思いがあります。努力だけでどうなるものでもないよという気持ちが見え隠れする。こうした世の中が若い世代に飲ませようとしているものからは、悪意や、偽りや、偽善や、妬みや、悪口が生まれてくるのではないか。そうではなくペテロが勧めるように、混じりけのない霊の乳であるキリストの言葉、裁きと赦しの言葉によって、自己実現、自己責任というしっぽを飲み込んだ蛇のような状態から解放されて、わたしたちの霊を不安にさいなまれて生きる自己責任の道から、生ける希望であるキリストにつながることで死すら眠りに変えられている平安のうちに歩むことが許されている。キリストにあって受けるときに、すべては良いのだという天に照準をおいた生き方へと変えていただける希望、その喜びに召されているのが、わたしたちの信仰が伝える真実ですから、この神の恵みによってわたしたちの生き方を上書きして頂いて、賛美と、感謝と、祈りをもって主を仰ぎ、ともどもに歩んで生きたく願っています。

お祈りいたします。